

シンポジウム報告

セクシュアル・マイノリティ研究における感情の記憶

—シンポジウム「資料から問い直す地域研究のあり方」に参加して—

阪野 桂子

はじめに

去る 2011 年 12 月 23 日、アジア社会文化研究会学生プロジェクト 2011 によるシンポジウム「資料から問い直す地域研究のあり方」が開催された。本稿では、主に午後の部のセッション 2「人とモノのエージェンシー」の内容をふまえながら、本シンポジウムから得ることができた示唆について述べる。

1. 原爆体験の継承における感情の記憶とモノ

楊小平氏の発表「モノの力と感情の記憶—被爆遺物の事例を通して—」では、広島平和記念資料館の事例を元に、個人とモノとの接触から生まれたネットワーク関係が原爆体験の継承に与える影響について主として議論された。その中で、ピースボランティアおよび証言活動に携わり、また原爆で亡くなった妹の服と日記を資料館に寄贈した M 氏の事例が取り上げられていた。

「原爆のことを伝えるには、モノだけでは足りない」と考える M 氏は、当事者が自分の体験を話すことによって生み出される臨場感に、語り部の意義を見出しているという。しかし、生身の人間には当然ながら寿命があるため、いずれ「当事者の生の語り」から、「原爆を直接体験していない世代による伝承」に移行されなければならない。一方モノは、保存のために適切な管理がなされていれば、持ち主が亡くなった後も、そのモノを見る人に「語りかけ」ことができる。

他方、被爆遺物が「原爆資料館の展示物」という集合的記憶の文脈の中に置かれることにはデメリットもある。被爆遺物が展示物となることで、その遺物は原爆の怖さや平和を伝える象徴となり、遺品が本来持っていたモノとしての多元性(家族の思いなど)が縮減されてしまう恐れがあるからである。

しかし、展示品となったモノの機能は、特定の歴史認識の伝達のみには止まらない。個人とモノとの接触によって個人の感情が引き出され、モノと人が互いに協働しながら原爆体験の意味を多元化する。さらにモノは、それ之前にした人々の間で、モノを通じた感情の記憶の共有を誘発することもある。楊氏は、モノを公的な象徴としてのみとらえるのではなく、モノへの理解を人の関係性のネットワークの中で再考する重要性を指摘していた。

2. セクシュアル・マイノリティ研究において

筆者は、セクシュアル・マイノリティ（ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーをはじめとした、異性愛以外の性的指向を持つ者の総称）の当事者性について研究している。セクシュアル・マイノリティにおける資料としては、文芸・映像作品、メディアでの描写、当事者の証言、ルポルタージュ、人権団体の刊行物など、主に文字媒体や映像媒体が用いられてきた。また、カミングアウトや証言活動の場面では、当事者の身体がセクシュアル・マイノリティの実在を証明するモノとして機能しているとみなすことができるかもしれない。また、セクシュアル・マイノリティに関する記述や証言のなかで、個人的な経験や思いは、差別的是正や少数者への理解という文脈において提示される。

ここで指摘したいのは、資料や当事者との対面から生じた感情の記憶を聞き手と当事者が共有することで、差別的是正などの集約的な認識がより容易に伝達されるということである。例えば、異性愛者でも体験しうる出来事についての記述は、「セクシュアル・マイノリティは日常の世界に“普通に”存在している」という認識に収斂される。ただし、当事者の経験や感情の記述は、たとえ一見セクシュアリティとは無関係に思えるものであっても、感情の記憶を読み手から引出し、「(異性愛者にとっての) 日常の世界」とセクシュアル・マイノリティとの接点を読み手に認識させる。資料や当事者の存在が発するメッセージが多義的であるからこそ、当事者と他者を結び付ける契機が生じるのではないかと考える。

おわりに

今回のシンポジウムでは、人と人とを繋げるネットワークの構築において、モノが果たす役割について考えるきっかけを得た。また、シンポジウム全体を通じて、様々な研究分野から研究対象を分析する方々の発表を拝聴することができた。今回得た学問的示唆を元にし、今後は、セクシュアル・マイノリティを事例として、「当事者の声」という文脈の下でテキスト化された個人の証言が、セクシュアル・マイノリティと異性愛者との間に関係性が形成される過程について考察を加えていきたい。

(m106699@hiroshima-u.ac.jp)